

武蔵野日曜講筵

貧者と富者

——ルカ伝第16章19～31節——

1991年2月17日

小池辰雄

モーセと預言者に聴け キリストと使徒に聴け キリストが生き給う 聖書を本当に身読する

【ルカ16】

19 或る富める人あり、紫色の衣と細布ほそぬのを着て、日々奢りおご樂しめり。20 又ラザロという貧しき者あり、腫物しゅもつにて腫れたはだれ、富める人の門かどに置かれ、21 その食卓より落つる物にて飽かあんと思しう。而してしか犬ども来りて其の腫物を舐ねれり。22 遂にこの貧しきもの死に、御使たちに携えられてアブラハムの懷裏ふところに入れり。富める人もまた死にて葬られしが、23 黄泉よみにて苦惱くるしみの中より目を挙げて遙はるかにアブラハムと其の懷裏ふところにおるラザロとを見る。24 乃ち呼よびて言いう「父アブラハムよ、我を憫あわれみて、ラザロを遣つかわし、その指のさきを水に浸して我が舌を冷させ給え、我はこの焰ほのおのなかに悶もたゆるなり」25 アブラハム言いう「子よ、憶おもえ、なんじは生ける間、なんじの善き物を受け、ラザロは悪あしき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶もたゆるなり。26 然しかのみならず此ここ処ところより汝らに渡り往かんとすとも得ず、其そこ処ところより我らに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大いなる淵ふち定めおかれたり」27 富める人また言いう「さらば父よ、願わくは我が父の家にラザロを遣したまえ。28 我に五人の兄弟あり、この苦痛くるしみのところに来らぬよう、彼らに証あかしせしめ給え」29 アブラハム言いう「彼らにはモーセと預言者とあり、之に聴くべし」30 富める人いう「いな父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改くわいあらためん」31 アブラハム言いう「もしモーセと預言者とに聴かずば、たとひ死人の中より甦よみがえる者ありとも、其の勸すすめを納いれざるべし」。

●モーセと預言者に聴け

これはルカ伝特有の記事です。他の福音書にはない。「紫色の衣」というのは、いわゆる富者、権力者、貴族連中が着る着物です。「細布」は下着のこと。「犬」というのは、ユダヤではけなされた動物になっている。「アブラハム」というのは信仰の典型的な人です。アブラハムとモーセとダビデはイスラエルの歴史では欠かすことができない。キリストの系譜で



「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」

と書いてある。アブラハムは信仰の祖、ダビデはメシアの型、モーセは律法の代名詞です。

「アブラハムの懐裏に入った」

というのは、本当に天国的に迎えられたということだ。「アブラハムの懐裏に入った」という言い方は非常に面白い。キリスト自身が神の懐にいた人だから、ヨハネ伝に書いてあるとおり。とにかく、その「ふところに入る」というのは、本当にその人と

「一つとなつている」

ということ。小さい子どもが母親の懐に入ると同じです。

「黄泉」という言葉は、ギリシヤ語では「ホ・ハデース」という。「ハデース」という言葉は、「ハ

(ア)はギリシヤ語で否定の文字です。「にあらざるもの」「デース」のものは「イデイン」「見る」という字です。「見る」ことのできない」「見られないもの」「見られない所」「暗くて見えない所」「陰府」「地獄」。ギリシヤでも、ヘブライでも、死んで行く所は暗いところ、見えない所です。ダンテの『神曲』でも地獄はだいぶ暗いね。天国と地獄、光と闇の世界です。

キリストという人は非常に詩人なんです。イエスは理屈のようなものの言い方をしない。譬え話や、野の草を見たり空の鳥を見たりして、具体的な言い方をする。具体的なもので表現するのが、詩の世界ですから。詩の世界で、いわゆる理屈を言ったらダメだ。

「因果応報」というのは、やつぱり魂の世界、道德の世界の法則なんだ。「ハーデス」には河が流れている。ここは「淵」だね。

「モーセと預言者」、旧約の律法の代名詞がモーセ、即ち、ユダヤ人の聖書は「律法と預言者」といって、アモス、ホゼア、ミカ、イザヤ、エレミヤ……と、ほとんど20人位いる。これが旧約聖書の一番大事なところなんです。その一番最高、最深のところはイザヤ書です。神さまから啓示をいただいた、皆カリスティックな霊的な人物です。「モーセ」は、律法によってどのように生活するかを成文律でもって決められている。それを大いに護ろうとする。

もう一つ、坊さんというのがある。祭司、これは宗教的な生活の一つの形式を皆に示していく。また、民の執成しをする。本当の祭司は大事なんです。執成しをして救いへともっていく。預言者は、むしろ審く。批判する。神の声を民に伝える。預言者は上からの言葉。祭司は横から上に向かって執成しをする。だから、本当の預言者はまた祭司的なものを持っている。第二イザヤなんかは正にそうです。

キリストは大預言者であり大祭司である。どっちも持っている。「大祭司の祈り」というのは、ヨハネ伝の17章のキリストの祈りです。預言者というのは、非連続の連続で、神の言を聴いては伝える連中です。みな単独です。祭司は、だんだん世襲的につないでいく。日本でも同じようなもんだ、坊さんというのは。しかし、本当の坊さんはやつぱり独りだ。一流の坊さんは皆独りびとり。

「神—キリスト—我」



という縦の関係です。

「孤軍万軍」

というのは、「孤」はそうであると、本当の仲間ができてくる。縦の関係のない、ただ仲間をつくっていると、これは必ず妬み争いになる。

今、中近東は、半分、宗教戦争だから困ったものだ。みな上からの啓示でもって、宗教はできている。それぞれの絶対性を持つているから、相対でありながら、それぞれの絶対性を持つている。お互いに尊重していかなければいかん。元は一つなんだ。それを、宗教争いをする。宗教の世界は、そういう争いは絶対に否定されなければダメだ。アラブ、イスラエル、パレスチナなんて、しょっちゅうやっているね。困ったもんだ。それを、突き抜けたのがキリストなんです。突き抜けた人を今度は殺してしまった。もうしようがないもんだ、この人間の世界は。

●キリストと使徒に聴け

「モーセと預言者」というのは、旧約聖書ということ。ユダヤ人はもちろん「旧約聖書」とは言わない。

「律法・預言者・諸書」「トラーラー・ネビーム・ウー・ケスビーム」

と言う。そして

「メシアはまだ来ない。そのうちに来る」

とあって、キリストをメシアとしないわけです。イエスというような、ああいう霊止ひとはもう絶対に出てこない。

「彼らにはモーセと預言者があり、之に聴くべし」

「これに聴いたらいいんだ。しっかりと聖書を読め」

と。

「もしモーセと預言者にと聴かずば、たとい死人の中より甦すえる者ありとも、

其の勸すすめを納いれざるべし」

と。話したってダメなんだ。大事なのは、

「聖書を読め」

ということだ、結論は。

「モーセと預言者を読まないで、他から聞いたって、そんなのはまたダメだ。神さ

まの権威であるところの聖書を読め」ということです。

キリストはこのように言われた。ところで、我々にとってはそれではどうなるのか。「モーセと預言者」ではない。モーセに代わってはキリストです。律法に代わるものは福音ですから。福音の主体はキリストです。預言者に代わるものは、使徒。キリストと使徒。我々に於ては、



この譬え話は、

「キリストと使徒に聴け。新約聖書を読め」

ということだ。キリストの時にはまだ新約聖書はないですから、本当はキリストは「我と私の弟子たち」と言いたいところなんだけれども、このユダヤ人に対しては「モーセと預言者」とおっしゃった。隠れた言は、

「我と使徒なり」

ということです。キリストと使徒たち。新約聖書のパウロの書翰、ペテロ、ヨハネ、黙示録。「キリスト」というのは福音書。「使徒」というのは使徒行伝以下。

「マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと使徒行伝以下を全部読め。新約聖書を読まないで、
どうのこうの言ったってダメだよ」

ということですよ。これは本当です。一切の真理の源泉はここに在る。だから、我々は行き詰まらない。

「本はたくさんある。万巻の書はある。けれども、その本のうちの本は聖書である」
と、大詩人ゲーテがそう言っている。本当に聖書を彼はよく読んだ。グラッドストーン、リンカーン、クロムウェル、ああいう一流の政治家でも、一流の科学者でもみんな聖書をよく読んでいる。マルクスさえ聖書を読んだ。ニーチェの哲学も聖書がなければ、あの哲学は出てこない。

●キリストが生き給う

聖書は人の「思想」ではない。「預言者の思想」とか「パウロの思想」とか言うが、「思想」なんていう言い方をしてはダメなんです。「思想」ではない。思われたところのものではないですから。聖書のもものは、神からの啓示の言葉ですから。人間の思想だったら、これは決して人を動かすことはできない。カントがいかに偉大であっても、プラトンがいかに偉大であっても、これは人を救うわけにはいかない。事実が証明するから、仕方がない。

しかし、普通の人は、それを「神の言ことば」なんて言ったって、

「何が神の言か」

と高をくくっているわけだ。しかも、また今度は聖書の読み方が困ったもんだ。頭で読んでいる、一生懸命で。研究している。これまたダメ。聖書は、聖書の現実の中に自分を投げ入れて、読むのではなく聴くのである。全部、受け身です。キリストの力に引つ張りまわされる。思われている世界ではない。それがキリストがここで言われているところの、

「モーセと預言者に聴け」

と言ったことです。「読め」と言わないで「聴け」と言われた。

「身体で聴け、耳ではないぞ、全存在で聴け」

と。魂の世界はゴマかしがきかないから、本当にその現実に入らなければ、力が来ない。



私は無教会にいた時に――もちろん先生たちは一流の先生です――今日はつまらなかったと思うことは一つもなかった。どの集会でも、何かを受けてきました。けれども、それはまだ頭と心までだった。全存在的に本当にひっくり返されるようなものではなかった。それは聖霊以前だから。み霊の力が欠けていたから。

召団の福音の使命はそこにある。無教会が、

「十字架、十字架」

と言っているけれど、本当の十字架ならば、必ず聖霊は来るんです。十字架が観念化してしまつた。気安めになつていゝる。

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず」

相対的人間小池は生きています。けれども、その根底では自分が生きていゝるなんていゝ世界ではない。そうすると、キリストが生き給う。だから、力が来る。

貧者、富者はどうでもいい。富者は心が驕つていゝる。貧者は魂が砕けていゝる、低い。だから、金の問題ではない。心の問題です。心が驕つていゝるから、流連荒亡の生活をやっていゝる。心といたつて、本当は魂だ。魂がお留守になつていゝる。この富者は現実に苦しめられたものだから、それで目が醒めたけれども、早く目が醒めてモーセと預言者を読めばよかつた。そうすれば、この貧者を助けてやつたんだけれども。

「水を舐めさせてください」

ではないんだ、本当は。

「私は本当に悪かつた」

と、そこで本当に悔い改めれば、平伏せば、あるいは、

「よし、お前を救つてやるぞ」

と。地獄まで降りていつたキリストですからね。十字架上の片一方の盜賊が、

「俺たちは散々悪い事をしたから、十字架に懸けられたつて、これは当然だけ

れども。せめても、聖国にいらつしやるときに私を覚えてください」

と言つたら、

「お前は今日私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。地獄に落ちるはずの奴が、マイナス99の生涯を送つた奴が、最後の瞬間に、その1を本当のプラスにした。そうしたら、キリストは天界に一番先きに連れていつた。これは本当にドラマです。大ドラマです。

「汝、今日我と共にパラダイスなり」

とは、素晴らしい言です。私は、もし自分の墓ができたら、そう書いてもらう。墓なんか要らないけれども。私の活ける墓は、私の書いた文字です。記念碑だから、これは仕方がない。



● 聖書を本当に身読する

このキリストの譬話は深刻な話ですね。

「聖書を本当に身読するかしないか、これが天国か地獄かだぞ」

という。もちろん、聖書を読まなくても、実に立派な生涯を送る人があります。誰が天国に行くかは誰も知らん。聖書を読んでいても、「どっこい」と言われる人もあるでしょう。その審判の内容は、一人びとりによつて、神さまが——決して普遍法則ではない——その一人びとりの全体をどのように見給うかは神のみぞ知る。誰も知らん。とにかく、しかし、「救いの道はここにあり」

というのははっきりしている。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ5:3)

あれは、

「霊の貧しき者は恵福なり、天国はその人のものなり」

です。霊が貧しい。現実にもた貧乏である。何も、貧しいとか、貧乏であることを誉めるわけではない。また富めることが悪いわけではない。お金は大いであつていい。ただ、それを本当に人のために、世のため人のために使うか、その在り方が問題です。

日本の坊さんの中で一番すごいのは一遍上人だ。本当に無一物だ。フランシスは本当に貧しさを自分の妻とした。また本当に愛をもつて生きていたから、小鳥もなついだ。フランシスが歌えば、小鳥がやってくる。人間が何を持っているか、持っていないか、そんなことはどうでもいい。一切は神のものです。心が本当に貧しいこと。私は万巻の書を持っている。けれども、もちろん詩の上でこれを活用します。これは神さまから私がいただいたものだから、これを神賛美のために活用する。

とにかく、問題は、無者となることです。無者であること。キリストは私たちを無者にしてくださった。相対的に「有る、無い」なんてどうでもいい。全部神のものとして自覚しているかということですよ。

日本の土地の問題も大変だ。土地は本来、神有なんだ。神の有ものなんだ。それは聖書に書いてある。どうせ、向こう側にいくときは、何も持てないよ。私は聖書だけは持って行きたいけれども、聖書も持っていけない。自分自身が聖書にならなければダメです、活ける文字に。

「汝らはキリストの文なり」

とパウロが言った。さすがはパウロだね。パウロの書翰を読んでごらん下さい。彼は、何といつても、特別な選びの器だ。楽しくならなければダメですよ、聖書を読むことが。しちめんどくさい顔して聖書を読んだつてダメです。楽しく、ご馳走を食べるような気持ちで、聖書を読まなければね。

